

ルカによる福音書9章51-62節 「エルサレムに御顔を向けるイエス」

1A サマリア人の拒絶 51-56

1B エルサレムを見ていた主 51

1C 天に上げられる日

1D 人の子への裏切り

2D エルサレムの破壊

3D 神の都

2C 毅然とした姿勢

2B サマリア人への宣教 52-56

1C 自分たちに向かないイエス 52-53

2C 天からの火 54

3C いのちを救われるイエス 55-56

2A 弟子の用意のない人々 57-62

1B 犠牲を伴う歩み 57-58

1C 一般的な発言 57

2C 寝る所もない宣教生活 58

2B 家族に優る御国 59-60

1C 家の整理 59

2C 不信者への依頼 60

3B 後ろを振り向かない決心 61-62

1C 家とのつながり 61

2C 完全な決心 62

本文

ルカによる福音書 9 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、9 章の 50 節まで来ました。今朝は、51 節から 9 章最後の 62 節まで一節ずつ見ていきたいと思います。早速ですが、51 節を読みます。

1A サマリア人の拒絶 51-56

1B エルサレムを見ていた主 51

51 さて、天に上げられる日が近づいて来たころのことであった。イエスは御顔をエルサレムに向け、毅然として進んで行かれた。

イエス様が、ついにご自分の死を意識して、エルサレムへの旅に出て行かれます。けれども、み

なさんの聖書、ルカによる福音書を見てください、まだ半分にも至りません。福音書全体は 24 章ありますが、まだ 9 章までしか来ていません。けれどもルカは、この時点からエルサレムへの旅を意識して書き始めます。他の福音書にはない特徴は、イエス様が宣教旅行をしていたガリラヤから、エルサレムへの旅が、ルカは実にここから 19 章にまで続くということです。ここから、私たちは、イエス様が私たちに言われた、「9:23 だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。」と言われていることを学んでいきます。

1C 天に上げられる日

ここで、とても興味深いのは、エルサレムにおいてイエス様が十字架に付けられることを表現するのに、「天に上げられる日が近づいて来た」と言っていることです。つまり、十字架に付けられて死なれるのが最期ではなく、三日目に甦り、それから天に上げられる、昇天されることを指しています。十字架の苦しみのある天への引き上げ、死に打ち勝ち、父なる神のみもとに戻るところに焦点を当て、それからエルサレムに向われることなのです。ヨハネの福音書では、そのことが何度となく強調されていて、「13:1 イエスは、この世を去って父のみもとに行く、ご自分の時が来たことを知っておられた。」と書いてあります。ご自分が父なる神からこの地に遣わされ、その使命が終わりに近づいている、間もなく父のところに戻るのだという思いが伝わって来ます。

1D 人の子への裏切り

その前に、イエス様は最も大事な使命を果たされます。イエス様はこれから、多くの苦しみに合います。自分の愛する十二弟子の一人から裏切られます。そしてユダヤ人のメシアとして来られたのに、その指導者らに捨てられます。そして異邦人、ローマ兵によってあざけられ、鞭打たれ、十字架の木を背負わされて、エルサレムの町を引きずり回されます。その上で、十字架に釘打ちで手足を打たれて、人々が「神の子なら十字架から降りてもらおうか」と罵られ、そしてついに、父なる神からも捨てられる体験をし、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになられたのですか。」と嘆かれます。しかし、主はご自分の息を引き取られる時、ご自身の霊を父にゆだねられ、全くご自身を父なる神にお任せになられたのです。三日目に、神はこの方を死人のうちから甦らせませす。

そして天に引き上げられるのですが、甦り、弟子たちにご自身を現わし、そして何よりもご自身の父のみもとに戻られる喜びがあったのです。ヘブル 12 章 2 節にこう書いてあります。「信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」ご自分の置かれた喜びがあるので、辱めをものともせず十字架を忍ばれました。

2D エルサレムの破壊

そして、エルサレムに御顔を向けた、ということは、エルサレムの破壊のことも念頭に入れていたのではないかと思います。「13:34-35 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣

わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

ユダヤ人を、ご自分を通して神のところに集めようとしたのに、それを望みませんでした。それゆえ、彼らの家は見捨てられます。そのために、イエス様は涙を流されました(19:41)。そして、70年にエルサレムはローマによって破壊され、ユダヤ人は散り散りになりました。けれども、再び今、集められています。イスラエルの国も建てられました。そして、彼らは大きな試練に入ることが、預言されています。イエス様が、大きな患難と呼ばれたものです。けれども、その終わりに、主の御名を呼び求めます。「祝福あれ、主の御名によって来られる方に」そこで初めて、再臨のイエス様をお迎えするのです。そして、神の国では十二人の使徒たちが治めるイスラエル十二部族の姿があります。ここでも、イエス様は勝利している中で、エルサレムがいずれ回復することを思っておられる中で、破壊されているエルサレムを見ておられます。

3D 神の都

そしてエルサレムは、新しい天、新しい地の中で、天から降りてきます。「黙示 21:2 私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとから、天から降ってくるのを見た。」

ですから、イエス様のお姿は後に来る栄光と比べた苦しみだったのです。パウロが、苦しみについて次のように述べています。「ローマ 8:18 今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」取るに足りないものとみなすことができるほど、やがて啓示される栄光は優れているということです。

2C 毅然とした姿勢

そしてイエス様は、「毅然として進んで行かれた」とあります。これは、二つの意味があるでしょう。一つは、もう後戻りしないということです。エルサレムに顔を向けたら、それから背を向けることはないということです。多くの苦しみを受けるけれども、それでどんなにご自分がもがいたとしても、事実、ゲッセマネの園で悶え苦しみつつ祈られますが、それでも後ろを振り向かないということです。もう一つは、横道にそれないということです。自分に与えられた道を歩いているけれども、それよりも、もっと魅力的に見えるようなものが見えたとしても、その道から逸れないということです。

2B サマリア人への宣教 52-56

1C 自分たちに向かないイエス 52-53

52 そして、ご自分の前に使いを送り出された。彼らは行ってサマリア人の村に入り、イエスのた

めに備えをした。53 しかし、イエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられたので、サマリア人はイエスを受け入れなかった。

ガリラヤ地方からエルサレムに向かうのに、最短の距離で行くには、サマリア山地を通ることです。それで前もって使いを送って、主をお迎えするための備えをさせます。それはあたかも、バプテスマのヨハネが主が来られるのを、悔い改めを説いて準備させたのに似ています。

ところが、「イエスが御顔をエルサレムに向けて進んでおられた」とあります。主はご自身が何を行われるのかをよく知っておられました。先に言ったように、横道に逸れることはありません。しばしば私たちは、主と共に歩む生活をしていると、主が言われていることとは異なる期待がかけられて、それを行わないと怒られたり、恨まれたりします。どう考えても、主が自分に語られていることではないのに、「あなたは、これこれをすべきです」と決めつけられます。イエス様がサマリアの村を通られた時、そのような期待がかけられたはずです。

サマリア人は、シェケムにあるゲリジム山こそが神の選ばれた山であると信じていました。サマリア人は、その民族の成り立ちからして、ユダヤ人とつながっていながらも、異なっていました。アッシリア捕囚によって、異邦人とイスラエル人との雑婚によって生まれたのがサマリア人です。そして宗教も、混合宗教になっていました。しかし、アブラハムやヤコブの族長は、シェケムを始めとする自分たちの地域を故郷としたということで、シオン、エルサレムはダビデの町という後から来たものであるという考えがありました。サマリアの女がイエス様に、この井戸はヤコブの時から使っているとして、ユダヤ人に対するサマリア人の優位性を語ったのです。彼ら自身は、これこそが真正な宗教だと思っていました。歴史の話に戻りますと、バビロンから帰還したユダヤ人たちが神殿を立て始めた時に、周囲のサマリア人が共に建てると言ったら、ユダヤ人たちは断りました。それで激しく怒り、阻止行動を起こしたのです。それで互いに敵対関係に入りました。サマリア人はユダヤ人を嫌い、ユダヤ人もサマリア人を嫌いました。

ユダヤ人にとって、また神の約束は、ダビデに約束されたところ、シオンの山、エルサレムであります。そこにメシアが来られて、苦しみを受け、そして甦ります。ですから、イエス様はサマリア人が望むようにはゲリジム山に顔を向けなかったのです。

2C 天からの火 54

54 弟子のヤコブとヨハネが、これを見て言った。「主よ。私たちが天から火を下して、彼らを焼き滅ぼしましょうか。」

ヤコブとヨハネです。二人はゼベダイの子です。彼らはペテロと共に、高い山に上りました。おそらく高慢になっていたのでしょう。自分たちは、キリストのそばにいる特別な存在で、後に右の座、

左の座についてしかるべきだと思っていたのでしょう。誰が最も偉いかという議論をしていたばかりです。ヨハネは、悪霊追い出しを自分たちの仲間ではない者たちが、イエス様の名によって行っていたのをやめさせようともしました。

ここで、ヤコブとヨハネは、自分たちがエリヤのように彼らを裁かないといけないと思ったのでしょう。イエス様を拒んだのですから、裁きを受けるに値すると思ったのでしょう。けれども、心が清いものではありませんでした。サマリア人は民族的な敵意をイエス様に向けました。それに反応して天からの火を下しましょうか？と言っています。つまり、民族的な対立に反応して、自らも民族意識を刺激されて、それに反応して火の裁き発言をしたからです。

イエス様は後に、ガリラヤ地方に戻り、コラジン、カペナウム、そしてベツサイダに対する裁きを宣言されます。けれども、これは忍耐の限りを尽くしてそこで働きを行われて、それでもその憐れみを受け入れなかった者たちに対する、公正な裁きの宣言です。仕返しをしたいというような復讐心から来たものではなく、まさにご自身の身を切るような痛みを伴ったはずです。

3C いのちを救われるイエス 55-56

55 しかし、イエスは振り向いて二人を叱られた。56 そして一行は別の村に行った。

主は強く叱られました。他の福音書の箇所では、「あなたがたは自分たちがどのような霊的状态にあるのかを知らないのです。人の子が来たのは、人のいのちを滅ぼすためではなくそれを救うためです。」と付け加えられています。このようにして、命を救うために来られたイエス様の使命があったのです。主は、こうした民族的対立感情も避けて通られたのです。そして、対立するのではなく、むしろ別の村に行かれました。受け入れないのであれば、他のところに行きなさいと弟子たちにもイエス様は指示を与えておられましたが、その通りにしました。

主は見据えておられたことでしょう、後にサマリア人が救われていくのを。サマリアの女の子もそうですが、決定的だったのは、使徒の働きでピリポがサマリア人に説教した時のことです。大いなる業が行われました。彼らは大勢信じて、聖霊に満たされました。私たちはこのことを見るまで、それについてはいけないのです。

2A 弟子の用意のない人々 57-62

そして、この旅をしておられる時に、三人の人が弟子になろうとしていたけれども、まだその心の備えが出来ていない場面が出てきます。

1B 犠牲を伴う歩み 57-58

57 彼らが道を進んで行くと、ある人がイエスに言った。「あなたがどこに行かれても、私はついて

行きます。」58 イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところありません。」一人目は、弟子として生きるのに、「犠牲を伴うことを知らない」ことであります。

1C 一般的な発言 57

ここで、「あなたがどこに行かれても」と彼は言っています。とても霊的に聞こえますね。どこに行かれても、私は付いていきますと。けれども、むしろどこにも献身する気持ちがないから、どこに行かれてもという事ができる言葉です。もし、私がこう神に祈ったらどうなるでしょうか。「神さま、世界が救われますように。」とても霊的ですね、全世界を網羅しましたね！すばらしい祈りに聞こえます。けれども、これは世界のどこのためにも祈っていない祈りとも言えるのです。一般的すぎて、どこにも力を入れていないのです。

2C 寝る所もない宣教生活 58

そこでイエス様の言葉はとても具体的ですね。「狐には穴があり、空の鳥には巣があるが、人の子には枕するところありません。」と言われます。これは極端に語られているのではないですね、事実、枕するところもないほどでした。旅をしておられて、眠る暇もないほどでした。向こう岸に渡ると言われた時は、嵐の中で眠っておられました。そして宿のようなものも見つからないところにおられたので、一夜を祈りで明かされることもありましたね。もしかしたらサマリアの村では、宿も与えられず、他の村に行かれたかもしれません。この地上では落ち着く先がなかったほどです。

弟子となる時は、このように具体性を持たなければいけません。全てを主に捧げたいというならば、具体的に自分が犠牲にしているところがあるかどうか？を自己吟味すればよいと思います。

2B 家族に優る御国 59-60

59 イエスは別の人に、「わたしに従って来なさい」と言われた。しかし、その人は言った。「まず行って、父を葬ることをお許してください。」60 イエスは彼に言われた。「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」第二の人は、「神の国が家族にまさることを知らなかった」という問題がありました。

1C 家の整理 59

ここで、この人の語っているところには、私たちアジア文化と同じ言い回しがあります。「まず行って、父を葬ることをお許してください。」と言っているのは、別に今、父親が死んだわけではありません。父は健在なのです。父を葬るところまで、待っていてください。それから私はあなたに従います、と言っているのです。これはとても身近ですね、「私は、自分の家系がある。だから、この家にいるかぎり、イエスの弟子になることはできない。」という考えです。私は 19 歳の時にイエス様を信じました。ですから大学一年生から二年生になる時だったのですが、その前に悩みました。父親が、高

校三年生の時でしょうか、家系になかった先祖の墓を責任をもって作ったのです。それまでは土に埋められていたお骨を集めて、墓を造ったばかりでした。私は、悩みました。自分は長男です、この墓を守らないといけません。

今、私がクリスチャンになり、父もそれから 14 年後にクリスチャンになりました。その墓が、解決を見ているでしょうか？いいえ、未だに完全な解決はありません。もし、私が父の葬ること、つまり家を受け継ぐところまで待っていたら、私も父もクリスチャンではなかったでしょう。

2C 不信者への依頼 60

イエス様が、「死人たちに、彼ら自身の死人たちを葬らせなさい。」とされています。これはとても大切な原則です。初めの「死人」は、霊的に死んだ人たちです。次の死人は、実際に死んだ人々です。つまり、死んだ人を葬らせることについては、まだ霊的に生きていない人、つまり信者ではない人たちに任せなさい、ということです。霊的に生まれた人は、新しい神の家にいます。ですから、どんなに調整しようとしても肉の家族に合わせることはできないのです。先ほどの、自分の家のことに戻りますが、母も父もイエス様を信じたのですが、家の仏壇はどうするのか？という話になりました。その中にある位牌を、檀家のお寺にお返しすることにしました。そう、元々のところに戻せばよいのです。お寺のものなのだから、お寺に返せばよいのです。また、家族でまだ信者でない人がいるならば、その人に任せればよいのです。

大事なものは、「あなたは出て行って、神の国を言い広めなさい。」であります。優先順位がどちらなのか？ということです。神の国を第一にするのです。

3B 後ろを振り向かない決心 61-62

61 また、別の人が言った。「主よ、あなたに従います。ただ、まず自分の家の者たちに、別れを告げることをお許しください。」62 すると、イエスは彼に言われた。「鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、神の国にふさわしくありません。」第三の人は、「後ろを振り向いてしまっている」過ちを犯している人です。

1C 家とのつながり 61

先ほどの家のことと同じですが、家のことを優先させています。ここでの言い回し、「まず自分の家の者たちに、別れを告げる」というのも、そうたやすいことではありません。リベカのことを思い出してください。アブラハムの僕がラバンの家に行った時に、ラバンたちがリベカにイサクの嫁になるのか尋ねたところ、行きますとのことでした。そしてアブラハムの僕は、間髪入れずに、次の日にさっそくりベカを連れて行こうとしました。彼らは、「創 24:55 娘をしばらく、十日間ほど私たちのもとにとどまらせて、その後で行かせるようにしたいのですが。」と言っているのです。これが別れを告げることであり、10 日も共にいたら、情が切れるどころかますます、深まってしまいます。せつかく

決心したことが揺らいでしまいます。士師記にも、何日も娘を留まらせている父親の姿が出て来ます(19章)。

ここに、「肉のつながり、情を優先させている」という問題があるのです。もちろん私たちが付き合いえば、情が出て来ます。そしてそれが原因で、主が前を向くように命じておられるのに、それにしぼられてどうしても全身出来ない場合があります。ついに、その情に縛られて、今、前に進んでいくことを否定的に見て、裁いて、過去に引きずり込もうとします。

2C 完全な決心 62

そこで、決別が必要なのです。「鋤に手をかけてからうしろを見る者はだれも、神の国にふさわしくありません。」鋤を手にかけてたら、前を向いて進んでいくしかありません。それが神の国だと言います。ノアというゴスペル・グループの歌で、こうあります。「もう振り向かない、振り向けない、イエス様に出会ったもう ふりむかない もう ふりむけない。もう つぶやかない もう つぶやけない。イエスさまと ともに 歩む日々は もう 輝いている。いつも イエスさまに 愛されているから」そうですね、結婚した人は分かるでしょう。結婚するまで、果たしてこの人が御心の人なのか？という悩みが出て来ます。けれども、一度、結婚したならば、その悩みや疑いは一瞬たりとも抱いてはいけません。それは、100 ٪、御心なのです。イエス様に従うこともそうです、100 ٪御心なのです。もう振り向かない、振り向けないのです。

ですから、この三人の人にイエス様が言われたことは、実はエルサレムに顔を向けておられるイエス様はご自身が実行されていました。枕する所もなく、そして肉の家族よりも霊の家族を優先させ、そしてサマリアの地域を通っても、横に逸れず、毅然としておられました。イエス様に従う準備はできていますか？